

麓を流下する無数の小河川と、深井戸による揚水であるが、分水嶺を境にして、その北では水に恵まれ、南では、一般に不足している。従って、農業も北では水田が中心であるが、南では畑、芝地等が中心となっている。

第四章：都市化の影響

本地域は東京から87 Km、電車で2時間足らずの距離にあり、都市化の影響もかなり大きい。東の箱根火山麓は古くから別荘地として開けており、又昭和43年に東名高速道路が完成すれば、京浜大都市地帯、東海都市群への通勤圏に入る為、住宅地としての発展も期待される。近代工業は昭和35年頃から、沼津工業地帯の延長として、南部地域から勃興し始めたが、現在はまだ萌芽の状態である。また本地域は富士山を控えた観光地でもあるが、めぼしい観光資源をもたない為、富士五湖地方及び箱根地方への通過客が殆んどである。

第五章：要 約

本地域の土地利用は、農業土地利用が中心であるが、工業地、住宅地、別荘地、観光地等の都市的土地利用もあり、全体として土地利用は多角的で、今後も無駄のない土地利用を行う事によって、多彩な方面に発展してゆくものと思われる。

小牧市の地理学的考察

石 黒 洋 子

論文の内容構成は次の通りである。

第一章 概 観

第二章 歴史的発達

第三章 自然環境

第一節 気 候

第二節 地形概観

第三節 地形区分

第四節 先史時代の地形

第五節 地下水の賦存状況

第四章 農 業

第一節 概 観

第二節 農業的土地利用の変遷と農業用水

- 第三節 農業の実態と最近の動向
- 第四節 都市化の影響
- 第五節 三部落の農業の実態 — 比較対照 —

第五章 都市化

序論

第一節 名古屋市の衛星都市としての小牧市

第二節 土地利用の変化と人口

第三節 工業化の実態

1. 工場進出状況
2. 工場分布状況
3. 進出工場の性格 — 本社との関係 —
4. 工場立地条件の分析

第四節 住宅化の実態

1. 住宅化の概況
2. 住宅化進行地域

第五節 小牧市内における都市化進行地域

第六章 小牧市の地域性と総合計画

調査地域である小牧市は、名古屋市の北方12Kmに位置し東西最長14.82Km、南北9.22Kmである。昭和30年市として発足した当時は人口3万の近在農村の買物町的性格をもつ田園都市であったが、以後、昭和33年の小牧飛行場の新活躍、昭和35年の高速道路の起点、内陸工業の中心としての維新を迎え大小の企業300余が誘致され昭和40年6万余の人口をもつに至った。ここ10年間における小牧市の顕著な変貌は農業面においても都市化の影響をあらわしている。

当市は尾張平野の南北のほとんど中央地点に位置し東西にして東端近くにある。周辺の地形は、東部より濃尾平野の沖積低地と洪積台地、新第三紀丘陵地、東部古生層山地とに大別でき、沖積低地はさらに犬山扇状地の東部末端部と木曾川の自然堤防の発達する木曾川中央低地とに区分できる。洪積台地は開析の程度により高位段丘面の桃山面と中位段丘面の田楽面、小牧面、低位段丘面の小木面の4つにわけられる。農業については、農村都市としての開発の歴史が江戸時代における農業用水の確保よりはじまるためまず土地利用の変遷と農業用水との関係を述べ現在の農業の実態把握を試みた。農業形態は地形と密接な関係にあり、西部平坦地の水田中心地帯と東部丘陵地のモモ、

リンゴを中心とする果樹栽培を副業とした水田地帯に大別できる。近年の急速な工業化、住宅化による農地減少によって専業農家にとっては比較的集約栽培による作付体系がとられ、野菜、果菜等の作付が増え、他に水田を畑地とし花卉・観葉作物の温室栽培が農家収入を上げる傾向にある。また愛知用水がこれらの農業生産向上への可能性を与えたとも云える。

小牧市の都市化については、名古屋市の衛星都市としての性格上名古屋市を中心とする中京圏内の都市化の進展と一致し昭和35年頃から急激に進みつつある。工業化は誘致工場を中心として進められ機械・金属が中心であるが、ここ2、3年は、名神・東名・中央の三大自動車道の結節点という交通の利点により、運輸業、サービス業などの進出が目立ち昭和41年完成の日本最大のトラック・ターミナルはさらにその傾向をうながすことになる。進出工場の本社は名古屋市が約60%をしめるが交通事情の緩和に伴い京阪神からの進出が著しくなりつつある。住宅化は、名古屋市の人口漏溢現象により県営住宅などの集団住宅が主体となり進められている。市内での都市化の進行は飛行場の存在によりその周辺では妨げられている。かくて小牧市の都市化は、名古屋市の衛星都市としてのベッドタウン的性格よりもむしろ新興工業都市としての色彩が強くなりつつある。

宇治市の地理学的考察

石原素子

調査地域は、京都府南部日山城国中央部に位置し、琵琶湖に源を発する宇治川が京都盆地に流れ出た谷口に旧宇治町を母体として、1951年附近町村の合併により成立した地域である。東西10.0km、南北10.7kmで京都府総面積の約1.5%にすぎない。

山城盆地で最も早く文化の開けた地で、西方前方に巨椋池を控え、自然の景観と天然の要害を兼ね、大化の頃から谷口の交通集落として発達し、史跡も多い。

研究内容を自然景観と人文景観に大きく分け、自然景観の中で地形と気候をとり扱った。

この地域の地形は、東半の大部分が古生層を基盤とする醍醐笠取山塊で、最高500m前後で、この山地を宇治川が嵌入メザンダーを描きつつ先行的に切っている。南部の宇治丘陵は、鮮新～洪積層にみられるbadlandの地貌が特徴的である。この地域は特に地形と地質の関係が密接で地形区分をすると、1)古生層山地、2)旧洪積丘陵、3)新洪積台地、4)沖積低地、と大きく4つに分類でき、2)3)はそれぞれ3段～2段の段丘地形を示し、3)は2)の縁辺を帯状にふちどっている。

人文景観では農業と都市化について扱い、あくまで農業を主とし、都市化による農業の変貌をみ